2013 年 7 月 17 日放送

漢方を理解するための10処方

日本漢方振興会漢方三考塾　講師　　**髙山　宏世**

（７）五苓散（ごれいさん）

この処方のキーワードは「水飲内蓄」です。

弁証のキーワードは、①尿不利、②口渇、③浮腫傾向、です。

今回迄の処方解説の中で、気・血・水のうち気と血に関する話は申し上げたので、今回は水をテーマにして処方の話をしたいと思います。

（どんな処方か？）

漢方では水分代謝を次のように考えています。

飲食によって胃に入った水分は脾で吸収され、脾の運化作用によって生理作用に参加する「津液」となって上昇し肺に運ばれます。肺に輸られてきた津液の一部は肺の宣発作用によって皮毛や腠理といった体表の組織を滋養したり、汗となって体外に排泄されます。津液の残りの部分は肺の粛降作用や心の運搬作用によって、血管や三焦を経由して体内の臓腑経絡、諸器官・組織に配布されます。

体内や皮膚に送られた津液は汗となった部分を除き、腎の働きによって回収され、ここで膀胱の気化作用によって再び三焦を経由して肺に持ち上げられて再利用される部分と、その尿として膀胱から体外に排泄される部分とに仕分けされます。こうして見ると、全身の水分代謝に直接関与する臓は脾と肺と腎、腑は胃と三焦と膀胱でそれぞれの役割分担も明らかです。

五苓散の証はこの水飲代謝の経路の中で膀胱の気化作用が失調して、体の下部に集められた水が三焦を上昇して再利用されることも、尿から排泄されることもできなくなった結果、水分が貯留して体が浮腫み、尿量減少即ち尿不利を来たす場合です。また水が三焦を上昇しないのでひどい咽の渇きを覚えます。

従って本方投与の要点は、尿量減少、口渇、浮腫傾向です。脉は浮あるいは浮数。数とは１分間に９０以上打つような速い脉。舌は湿潤で、白い苔がベッタリ付着した白膩苔です。腹部は緊張正常で、心下に痞えや時に皮下に浮腫を見ます。

（五苓散の原典）

五苓散の出典は『傷寒論』で、本方は外感病で風寒の邪が太陽膀胱経脉から侵入したものが、初期の太陽病で治まらず、病邪は足膀胱経脉の中を深く進行して、太陽経脉に繋がった膀胱腑に侵入し、膀胱の働きを失調させた太陽腑病の水飲内蓄証と謂われる病態を治療する薬です。その後、時代と共に外感病に限らずどのような原因にせよ膀胱の気化作用が失調したのが原因で尿不利、浮腫み、口渇を生じた状態を主治する処方として広く用いられるようになりました。**五苓散**の条文は何か条もあります。

「太陽病、汗ヲ発シテ後大イニ汗出デ、胃中乾キ煩躁シテ眠ルヲ得ズ、水ヲ飲ムヲ得ント欲スル者ハ少々與エテ之ヲ飲マセ、胃気ヲ和サシムレバ則チ愈ユ。若シ脉浮、小便不利、微熱シテ、消渇スル者ハ**五苓散**之ヲ主ル」（太陽病中篇、第７１条）。

「発汗シ已リテ脉浮数、煩渇スル者ハ**五苓散**之ヲ主ル」（同　７２条）

７１条は前後２段に分かれています。前半は太陽病の初期に規定通り発汗法を行なったが、発汗させ過ぎた結果、津液を失わせて胃中が乾燥して口渇煩躁したもので、これは水分を補給してやれば良く、薬は必要ない状況です。後半は発汗治療しても太陽病の邪は解消されず、外感の邪が足太陽経脉に続く膀胱腑に入り膀胱の気化作用を失調させて尿不利、消渇（これは強い口渇です）を生じたもので、まさに**五苓散**で主治すべき証です。脉浮・微熱という症状は太陽病初期の症状も同時に残存していることを示しています。

７２条は７１条の内容を補足したものと考えられます。

「傷寒、汗出テ渇スル者ハ**五苓散**之ヲ主ル。渇セザル者ハ茯苓甘草湯之ヲ主ル」（同　７３条）。

浮腫と尿不利という症状は先に挙げた水飲代謝のどの過程が障害されても生じ得ます。しかし漢方では口渇を伴う尿不利は水気が三焦を通って正しく再上昇しない場合に限って起こると考えるので、本条は口渇の有無だけで**五苓散**証と**茯苓甘草湯**証とを鑑別しています。**五苓散**の証は膀胱の気化作用が働かず三焦を水分が昇らず尿不利が生じるのに対し、**茯苓甘草湯**証は脾が水分を吸収する作用が失調して尿不利を呈するからです。この場合口渇を伴う尿不利は膀胱の気化作用の失調と診て五苓散を与えて水飲代謝の失調を是正し、口渇が無いときは脾から肺への経路で水が止まっていると判断して、脾に溜まった水を排

泄させる**茯苓甘草湯**を与えるのです。

「中風、発熱六七日解セズ、煩シテ表裏ノ証有リ、渇シテ水ヲ飲マント欲スレド水入レバ則チ吐ス者ハ名ズケテ水逆ト曰ウ。**五苓散**之ヲ主ル」（第同　７４条）。

「水逆」というのは「水邪上逆」の意味で、外感病の太陽病が数日続いて、表証が持続すると共に、水飲内蓄の太陽腑病も併発した状態になると全身に貯留した水が停滞して動かず、胃中の水が上逆し、口渇は取れないのに水を飲めば即座に吐く水逆という症状が出るが、これも**五苓散**で膀胱の気化作用を正常にし、水を動かしてやれば治るという意味です。

「霍亂、頭痛、発熱、身疼痛、熱多ク水ヲ飲マント欲ス者ハ**五苓散**之ヲ主ル。寒多ク水ヲ用イザル者ハ**理中丸**之ヲ主ル」（霍乱病篇　第３８６条）。

霍亂とは急性の嘔吐下痢症で外感病の一種です。熱性で頭痛・身痛などの表証に嘔吐下痢が加って口が渇く場合は第７１条の前半の脱水に、後半の膀胱の気化作用の失調も伴っていると考えられるので、五苓散を与えて膀胱の気化作用を修復してやる必要があるのです。寒証で口渇が無い場合は理中丸でただ脾胃を温補してやれば脾胃は正常に働くので下利も嘔吐も治ります。

その他、**五苓散**は『傷寒論』では１４１、１５６、２４４の各条に登場しますが、ここに出した条文を補遺するだけなので省略します。

『金匱要略』には「仮令痩人臍下ニ悸有リテ、涎沫ヲ吐シテ癲眩スルハ此レ水也。五**苓散**之ヲ主ル」（痰飲欬嗽病篇　第１２）という条文があります。

本条は胃に在る過剰な水飲が胃から上逆して嘔吐と共に動悸と眩暈を起すもので、五苓散で過剰な水分を排泄すれば水の分布は正常に戻って症状は除かれます。この条文により、**五苓散**は太陽傷寒による膀胱の気化失調だけでなく内傷雑病に因る水飲内蓄の証にも用いられることが理解されます。

（五苓散の処方構成）

五苓散は茯苓・猪苓・沢瀉・白朮・桂枝の５味で構成されています。この処方の君臣佐使は諸説ありますが、最も有力な成無已や許宏の説に従い、君薬は滲出利水薬の代表である茯苓にすべきと考えます。茯苓は体内の余分な水分を下に排泄すると共に心と脾を補う働きが有ります。臣薬は利水の専薬の猪苓で、水を排泄する力が最も顕著です。佐薬は白朮で補脾燥湿に働き茯苓と共に脾胃に貯留した水気を能く除きます。使薬は沢瀉と桂枝で、沢瀉は腎と膀胱に行き利水と膀胱の湿熱を除く働きを兼備しており、茯苓・猪苓と併用すると利水作用が倍加します。桂枝は温性の薬で、残存する太陽病の表邪を発散すると共に陽気を補い腎を温め、三焦の水の流通を回復させます。また５薬の内４つは寒性の利水薬ですが、中に只１つ陽性で気薬の桂枝が入ることに因って処方全体の働きが奮発活性化すると考えられています。

（五苓散の臨床応用）

五苓散は太陽病の残余の表証を治すだけではなく、利水・利尿の専剤として、外感病だけでなく、内傷雑病に起因する例も含め水飲内蓄の証を治す第一選択の処方です。その処方構成と原典の条文から、水飲代謝のどの過程で生じた尿量減少・浮腫・口渇及び水分逆上に因る嘔吐・動悸・眩暈などの随伴症状も含めて適用されることがお解り頂けたと思います。

従って、臨床的には急性或いは慢性の腎障害、ネフローゼ症候群、突発性浮腫、急性水様性下痢嘔吐症、メニエル病や特発性眩暈症、或いは二日酔いなど体内の水分の過剰や停滞に因って起る諸病に幅広く応用が可能です。

ただ脱水に因る尿量減少や口渇には禁忌です。